

**教員による「語り継ぎ」のジレンマに関する研究**  
 - 事件・事故・災害の未体験教員と「環状島」をモデルとして -  
**Research on the dilemma of “talking” by teachers.**  
 - As model of an unexperienced teachers in incidents,  
 accidents, and disasters and “ring island” -

松井 典夫  
 Norio MATSUI

### 要旨 (Abstract)

本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的としてきた。その中で、「語り継ぎ」のジレンマは、環状島のポイントとインタビューによって明らかになった。また、それぞれのモデルが、外海（傍観者）から外斜面に登り始めるきっかけは、その当事者の近くに行くという、ある意味で運命的な事象が働いたことがわかった。そして、そのジレンマを乗り越えるきっかけとして、立場の変化や他者からの評価が強く働いたことがわかった。

キーワード：語り継ぎ ジレンマ 環状島 教師 災害

## 1. 研究の背景と目的

### 1-1. 3つの対象事例が抱える課題

本研究は、その対象事例として1995年1月に発生した兵庫県南部沖地震（以下、阪神・淡路大震災）・2001年6月に発生した大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件（以下、池田小事件）・2016年4月に発生した熊本地震について取り扱う。

阪神・淡路大震災（1995年1月）が発生して25年が経とうとしている（2019年6月現在）。学校教育においてはこれまで、震災の教訓やそれに基づいた防災教育は、兵庫県を中心として継続的に進められてきた。しかしそこには、年月の経過に伴う課題が生まれている。発生から25年という年月は、震災時に中堅教員（教職10年～15年と仮に捉えれば）だと退職を目前に控えているか、あるいは退職者が増加する時期である。そこには、学校教育において、震災の教訓を語り継ぐのはだれなのか、という課題が見え隠れし始めている。

あるいは2001年6月に発生した池田小事件については、その発生から18年が経過した。事件では、小学校1、2年生の児童が被害に遭った。8名の児童の命が失われ、15名の児童、教員が重軽傷を負った。同小ではその当時の児童が卒業した2005年から2006年にかけて、事件時にいた教員の多くが同小を去った。そこで同小では、「語り継ぎ」の課題が生じた。

2016年4月に発生した熊本地震では、被災していない教員が、被災地の「防災担当教員」として転任し、メディアへの露出も含めて様々なジレンマを生じさせながら、担当業務に取り組む様子が見られる。そのような本研究のモデルとなった3事例について、以下に述べる。

### 1-2. 本研究のモデルとその背景

本研究の3つのモデルは、それぞれが同様の「語り継ぎのジレンマ」を内面に潜在させていながら、表出させていなかった。そのきっかけもなく、あるいはそのジレンマを認知していなかった。しかしそれぞれが接点を持ち、互いにそのジレンマに気づき合った。その過程を以下に述べる。

本研究の関心の中心となるターゲットは筆者自身（以下、M）であった。Mは元小学校教員であり、大阪府立小学校に勤務したのち、2005年から2014年まで大阪教育大学附属池田小学校（以下、附池小）に勤務した。先に述べたように、附池小では2001年6月に、校内に一人の暴漢が侵入し、児童8名の命を失い、15名の重軽傷者（うち教員2名）を出す事件が発生した。Mが当校に赴任したのは2005年4月であり、事件からおよそ4年経った頃だった。事件時に被害の大きかった1, 2年生が5, 6年生として在学し、当時はまだ、「事件時にいた教師」も多数勤務していた。その中で、Mは赴任当初から「自分は事件を知らない」というジレンマを抱えていた。

次のモデルは、本研究において「語り継ぎ」のジレンマの存在への関心のトリガーとなった教師（以下、I）である。Iは現在、兵庫県の公立中学校教員である。勤務する中学校では、1995年に発生した阪神・淡路大震災の被害で生徒の命を失った。それ以来、毎年1月17日（以下、1.17）には追悼集会を行い、防災教育を実施している。その中でIは中心的な役割を果たしてきたが、震災時とそれ以降教師になるまで、他府県で生まれ育ったIは、「自分は震災を体験していない」というジレンマを抱えていた。

3つ目のモデルは熊本県の教師（以下、F）である。Fは2017年3月末まで熊本市内の小学校に勤務し、2016年4月に発生した熊本地震では大きな被害はなかったという。だが2017年4月、益城町立小学校に「防災担当教員」として赴任した。益城町は熊本地震で非常に大きく被災した地域であり、Fが赴任した小学校はその象徴的な小学校として常にメディアの注目を集めていた。そこでメディアにも露出する機会が多くなったFは、外から来て突然その象徴的な存在となることにジレンマを抱えていたという。

### 1-3. 本研究の目的

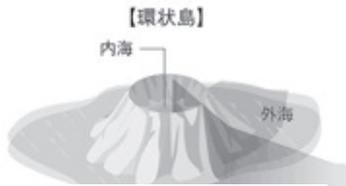
本研究に関連する研究では、阪神・淡路大震災から8年における震災体験の記録を分析した研究（矢守、2003）や、同様に震災体験の「語り継ぎ」の実践記録等は多く存在するが（高森・諏訪2012、永村・佐藤・柴山・今村・岩崎2013、高野・渥美2007ほか）、いずれも震災関連については被災体験者による語りに基づいた研究であり、事件関連については「語り継ぎ」に関連した研究は見られない。あるいは小山田・長谷部・小谷・安江・伊藤（2012）は、東日本大震災の被災地復興をめぐる支援者と被災者の関係性について、ジンメルの「よそ者論」をモデルにし、両者の「ケア」と「共感」の可能性について論考したが、その対象（支援者の）は大学生と一般市民である。本研究では「語り継ぎ」の場を学校教育としており、語り手は教員であり、その目的は事件や震災の教訓を学校教育において「語り継ぐ」こととしているため、関連した研究は見当たらない。

そこで本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的とする。また、教員がそのジレンマを乗り越えて行く「語り継ぎ」は、その対象（児童や他の教員）にどのような有効性を持つのかを明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法

### 2-1. 環状島というモデルについて

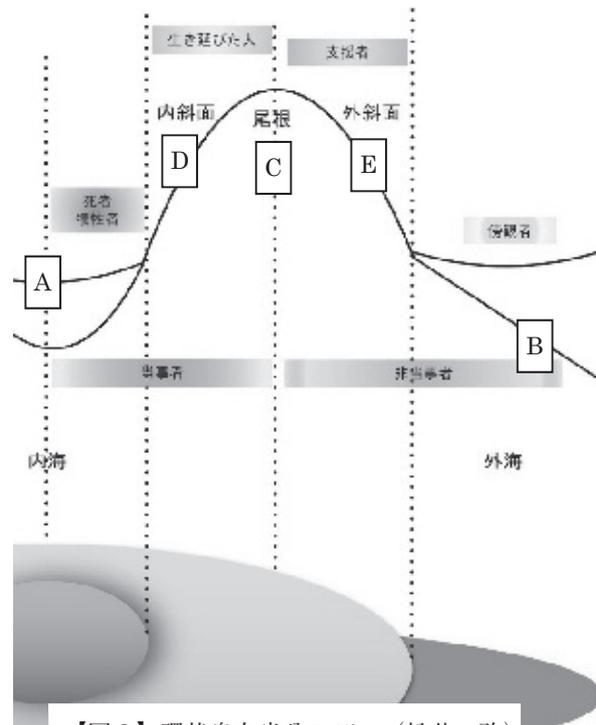
精神科医の宮地尚子は、トラウマを語るポジショナリティーを「環状島」というメタファーを用いて表現した（図1）。このモデルは、災害等の被害当事者やその周辺、支援者など、心の傷（トラウマ）を巡る人々の関係性



【図1】（宮地、2007）

や状態を、文字通り「環の形をした島」で表したものである。環の中心は窪み、そこに内海（死者、犠牲者）がある（図2-A）。島の周囲は外海（非当事者、傍観者）で囲まれている（図2-B）。島には尾根があり（図2-C）、内海側の内斜面（生き延びた人、生還者など 図2-D）と外海側の外斜面（支援者など 図2-E）がある。

そして最も高い部分にある尾根の周辺には、感情のもつれや葛藤などの暴風が吹き荒れると宮地は論じた。このモデルは、本研究における「語り継ぎ」のジレンマにおいて、その語り手のポジショナリティーを表現する上で有効なメタファーであると考えた。本研究は、事件や災害を経験していない教員が、「語り継ぎ」をせざるを得ない、あるいは能動的にその立場に立った時のジレンマ（自身は経験していないことを語っても良いのかという）について研究することを目的としている。したがって、環状島のモデルはそのメタファーとして有効に作用すると考えたのである。



【図2】環状島右半分モデル（松井 改）

### 2-2. 非構造化インタビュー

本研究では、前出の3つの事例について、それぞれ本研究に適合する条件の教員等に非構造化インタビューを実施した。インタビュー内容については、主としてインフォーマントと事件・災害との関係性や「語り継ぎ」の内容、方法、ジレンマについて質問した。また、環状島について説明を加えたあと、そのポジショナリティーについて、インフォーマント自ら島の位置にポイントしながら、その理由やきっかけについて語る方法を用いた。

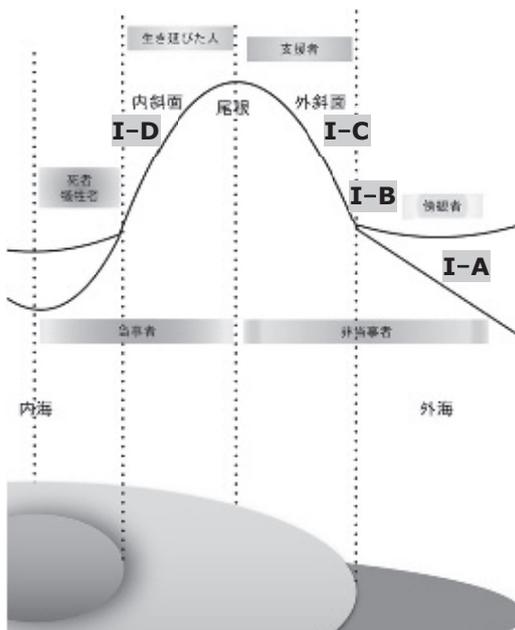
インタビューの内容は以下の通りである。

- ① あなたと災害（事件・事故）について教えてください。
  1. あなたは、どのような事件・事故・災害と関わっていますか。
  2. あなたはその時、どこにいて、どのように関わりましたか。
  3. その対象（事件・事故・災害）は、あなたの教職にどのような影響を及ぼしましたか。
- ② 「環状島」について教えてください。
  1. あなたは今、「環状島」のどこにいますか。（図に位置を示してもらおう）
  2. なぜ、そのように思いましたか。

3. いつ、どこからどこへ移動（環状島において）したと思いますか。
  4. そのきっかけは何でしたか。
- ③ 「語り継ぎ」について教えてください。
1. あなたの「語り継ぎ」の対象は何（だれ）ですか。
  2. 「語り継ぎ」の内容と方法について教えてください。
  3. 「語り継ぎ」で工夫していること、留意していることは何ですか。
  4. 「語り継ぎ」の上で障害になるものは何ですか。
  5. それはどのような障害であり、それをどのように乗り越えますか（乗り越えましたか）。
  6. あなたは、なぜ「語り継ぎ」をするのですか。

### 3. 環状島をモデルにした「語り継ぎ」のジレンマの様相

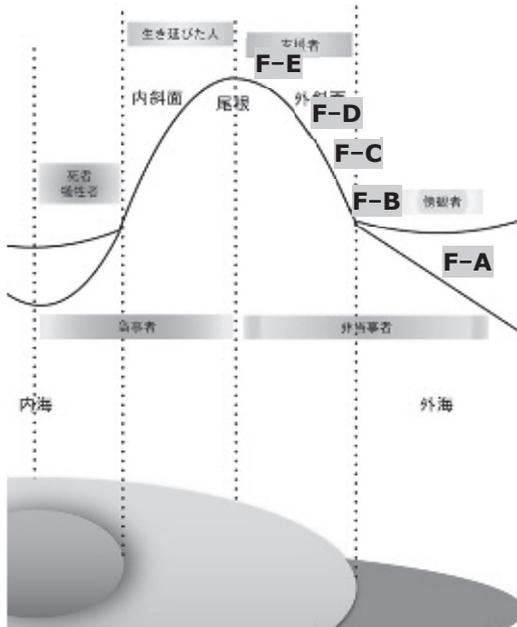
#### 3-1. Iの環状島の様相



I-A	震災発生時は〇〇県にいた。まるで他人事だった。まだ幼かった。奈良県に祖母がいて、それを心配した。日常は平穏だった。
I-B	教師になって1年目。まだ外海（傍観者）にいる感じだった。大人になったから少し近づいただけ。
I-C	兵庫県のS中学校に赴任して、外斜面を登り始めた。震災について考え始め、知り始めた。震災で教え子を亡くした教師と同僚になり、色々な話しをするようになった。
I-D	この1、2年で、慰霊祭を中心的に進めるようになった。色々な資料を読むようになった。自身の中で深まっている。一方で、当事者ではないものが踏み込んでいいのか、相当の覚悟がいるだろうと感じている。

【図3】 Iの環状島（2019年7月12日記入）

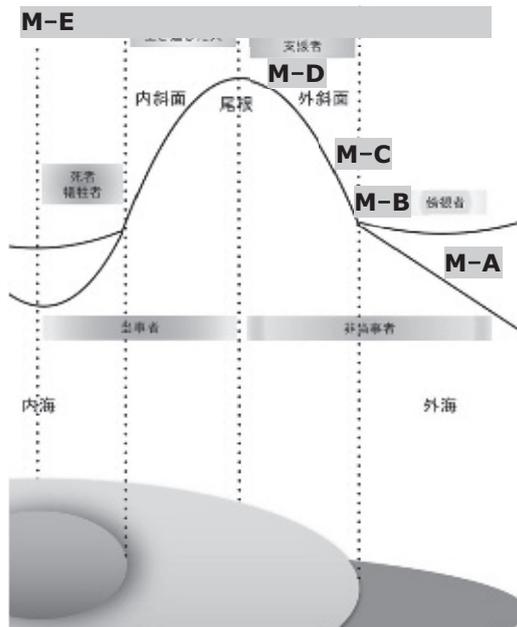
3-2. Fの環状島の様相



【図4】 Fの環状島 (2019年7月2日記入)

F-A	熊本市内の教師。学校は避難所となったが、教師がタッチすることはなかった。
F-B	2017年4月。益城町立小学校に転任。「防災担当教員」として赴任したところ。子供達が被災者であるという実感と、それが見えないという焦燥。戸惑いがあった。
F-C	2018年3月ころ。1年を終え、取り組みや子供の反応の手応えを感じ始めた。防災担当教員という前例がないからこそ、自分がやるのだという意欲が湧いてきた。
F-D	2019年3月ころ。記録集を完成させたという自負があった。子供たちの変容を実感できた。前向きな作文を書くようになった。
F-E	現在 (2019年7月)。防災担当教員として最終年であるという思い。

3-3. Mの環状島の様相



【図5】 Mの環状島 (2019年7月4日記入)

M-A	2001年～2005年 公立小学校教員時代。事件のことは職員室のテレビで知った。ショックだったがピンとこなかった。
M-B	2005年 附池小に赴任。自分は事件を知らないのだということがコンプレックスになっていた。遺族との関係に苦慮した。
M-C	2007年3月 亡くなった児童のための卒業式を目の当たりにし、コンプレックスを払拭しようとするようになった。「語り継ぎ」をしなければならないという自負が生じた。
M-D	2008年～ 学校安全主任・安全科発足のチーフとして、責任感が生じた。
M-E	2014年～現在 大学教員となり、附池小や事件を客観的に見ることができるようになった。何か空をふわふわ揺らいで動きながら、時には傍観者になり、時には内海(当事者)にいるような思いに駆られ、そのような発言をすることもある。

4. 考察

4-1. ポジショナリティーの変容

ポジショナリティーは内海の立場が外海に対して問うものであると宮地は述べている。過去に発生した事件や災害について語るポジショナリティーは、語る者の立場の変化に応じて変容するものであると考えられる。本研究の

3者のモデルは、それぞれがその事件・災害に対しては外海にいた点で共通するが、さらに立場の変化（ここでは、当事者がいる場所への赴任）によって外斜面を登り始めるという点でも共通項を持つ。そこで、「語り継ぎ」の責務を負い始める。宮地の環状島のモデルでは、「当事者ではないが支援者や関心を持つもの、わずかながらもコミットしようとするもの」が外斜面にいるという。そして、コミットメントの程度が強いものほど〈尾根〉に近づき、関わっているうちに、非当事者にまで被害が及んだり、代理外傷（二次的外傷）を負うこともあり、当事者性を帯びるようになり、〈尾根〉より内側に行くこともあるという。

例えばIは、I-Cで外斜面にポイントしている。Iはある研究会で1.17に関連する発表をしながら、その冒頭で「自分は震災を体験していない」という発言をあえてしている。そこには、外斜面にいるという認証を得ようとすることによって、そのポジショナリティーの困難性を明確にしようとしているように感じられるのである。しかしその後、IはI-Dで内斜面にポイントしている。インタビューの中ではその理由として、内斜面から内海を見ているという「覚悟」のようなものがあるという発言をしている。このことは、一見すると前向きなポジショナリティーの変容に見えるが、実は宮地の言う代理外傷の可能性を秘めるものだと捉えることも可能である。このことから、環状島の構造上、その斜面は「登る」ためだけにあるのではなく、「転げ落ちる」可能性も秘めていることを、Iのポジショナリティーの変容から推察されるのである。

#### 4-2. 内斜面との共感の可能性

宮地は環状島のモデルを発想したベースに、広島や長崎の原爆被害の爆心地を中心とした同心円のイメージがあったことを明らかにしている。したがって内海はまさに爆心地（グラウンド・ゼロ）であり、そこは犠牲者、被災者、死者の沈んだ領域であって、そこにいるものは語ることのできない、言葉を発することができないものである。そして、本研究のモデルと極めて重要な関係性を持つのが、内海に近いところにいる内斜面にいる人々である。そこに「だれ」がいるのか、それぞれのモデルにおいて整理すると、まずIの関連である阪神・淡路大震災では、被災し、近親者を亡くしたもの、住居や職業を失ったもの、被災したが生き延びたものに当たる。Fが関連する熊本地震では、阪神・淡路大震災と同様に、近親者を亡くしたり、住居を失ったものに当たる。Mが関連する池田小事件では、内海にもっとも近いところに、事件で命を失った児童の遺族がいて、また、事件で怪我をした児童がいる。あるいは事件を目の当たりにした児童もここにいるだろう。

内斜面との関係性において、Mはインタビューの中で「遺族」との関係性を多く語った。M-Bは「遺族との関係に苦慮した」時期であったが、そこには、「事件を知らない」というある種のコンプレックスの存在があり、また、遺族との信頼性において、「事件を知らない教師に何がわかるのか」という目に見えない壁を感じていたという。しかし、その関係性はMの事件を背景とした学校安全への取り組みによって変容したという。Mはインタビューの中で、「どこか自分では、遺族のために、あるいは遺族に認められたいという欲求が自身を衝き動かしていた」と発言している。このことから、内斜面と外斜面の関係性とそのポジショナリティーについて、「共感」や「ケア」の可能性を示唆するものとなった。

#### 4-3. 「語り継ぎ」のジレンマとの闘いと救い

熊本地震に関連したFへの調査の中で、Mとの関連を示唆する発言があった。2016年4月の熊本地震以降、Mは避難所を運営する教員の研究（松井・岡村、2018）で度々、のちにFが赴任した益城町立小学校を訪れていた。震災から1年の2017年4月16日。Mは当校の校長の依頼で、保護者と教員向けに講演を行なった。そこでMは、池田小事件に関連して、「事件を知らない自分」について話していた。その講演を実際に聞いていたFは、そのジレンマはあっていいのだ、そして乗り越えられるのだ、という共感を得たという。またFはその語りの中で、「語り継

ぎ」のジレンマを乗り越えたきっかけとして、他者からの「理解」と「評価」を挙げた。他者とは、2018年から当校に赴任した校長であった。その校長もまた、Fと同じように震災後に赴任しているため、当初は戸惑いを感じていた。その中でFに対して共感的にアドバイスを送るなどし、随分そのジレンマから救い出されたという。

「語り継ぎ」のジレンマとの闘い方と救いは、それぞれのモデルによって違う様相、方法を示している。Mの場合、そのジレンマを乗り越えるきっかけとなったのは、亡くなった児童の卒業式であったと述べたが、それでも在職中はそのジレンマと常に隣り合わせにいた。しかし、環状島のM-Eにおいて、Mは島を離れて俯瞰の位置にポイントしている。このことは、宮地の環状島のモデルにおいても整理されている。この位置は宮地によると「研究者の位置」であり、宮地はそれをヘリコプターで表現している。ヘリコプターは移動自由であり、様々な場所から事象を複眼的、総合的に見ることができる。したがって、かつて加害者がいたゼロ地点の真上に行くこともできるし、当事者と同じ位置を上空から俯瞰することもできる。そして立ち去ろうと思えばいつでも立ち去ることができると宮地は述べた。このことから、「研究者の位置」に行くことが、Mにとっての「救い」になったのかもしれない。

#### 4-4. おわりに

本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的としてきた。その中で、「語り継ぎ」のジレンマは、環状島のポイントとインタビューによって明らかになったといえよう。また、それぞれのモデルが、外海（傍観者）から外斜面に登り始めるきっかけは、その当事者の近くに行くという、ある意味で運命的な事象が働いたことがわかった。そして、そのジレンマを乗り越えるきっかけとして、立場の変化や他者からの評価が強く働いたことがわかった。

本研究の中でそれぞれのモデルにインタビューや調査を実施する中で、「語り継ぎ」のジレンマは、それを「語り継ごう」とする意欲と責任感を持つものが抱きうるものであるということが示唆された。したがって、逃げようと思えば逃げられるものであり、そのジレンマに苛まれたものの苦しみは、ある意味で尊いものであるのではないだろうか。

本研究では、教員がそのジレンマを乗り越えて行う「語り継ぎ」は、その対象（児童や他の教員）にどのような有効性を持つのかを明らかにすることはできなかった。今後の課題として、さらに他の事件や災害についての「語り継ぎ」について、調査を継続し、明らかにしていきたい。

#### 註

本研究は、令和元年-3年度科学研究費助成事業（基盤研究C：課題番号19K2694）の助成を得て実施されたものである。

#### 引用・参考文献

宮地尚子 著「環状島＝トラウマの地政学」2007年 みすず書房

矢守克也 2003「トランスクリプト - 4人の震災被災者が語る現在 -」奈良大学紀要 第31号 pp.253-282

小山田晋・長谷部正・小谷忍・安江紘幸・伊藤まき子 2012「東日本大震災被災地復興に対するよそ者のかかわり方に関する倫理学的研究」東北大学紀要 第43号 pp.15-36

高森順子・諏訪晃一 2014「災害体験の手記集の成立過程に関する一考察 - 「阪神大震災を記録し続ける会」の

- 事例から－」実験社会心理学研究 第54巻 第1号 pp.25-39
- 高野尚子・渥美公秀 2007「阪神・淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考察－対話の綻びを巡って－」  
実験社会心理学研究 第46巻 第2号 pp.185-197
- 阪本真由美・木村周平・松多信尚・松岡格・矢守克也 2009「地震の記憶とその語り継ぎに関する国際比較研究  
－トルコ・台湾・インドネシアの地域間比較から－」京都大学防災研究所年報 第52号B pp.181-193
- 永村美奈・佐藤翔輔・柴山明寛・今村文彦・岩崎雅宏 2013「東日本大震災に関する記録・証言などの収集活動の  
現状と課題」日本記録管理学会誌 第64号 pp.49-66
- 阪本真由美・矢守克也 2010「災害ミュージアムを通じた記憶の継承に関する一考察－地震災害のミュージアム  
を中心に－」自然災害科学 第29巻 第2号 pp.179-188
- 宮本匠・渥美公秀 2009「災害復興における物語と外部支援者の役割について－新潟県中越地震の事例から－」  
実験社会心理学研究 第49巻 第1号 pp.17-31
- 村上登司文 2018「戦争体験継承に対する当事者意識を育てる教育の考察」京都教育大学教育実践研究紀要 第18  
号 pp.173-182
- 佐藤翔輔・平川雄太・新家杏奈・今村文彦 2017「災害伝承は津波避難行動を誘引したのか－陸前高田市における  
質問紙調査を用いた事例分析－」地域安全学会論文集 第31号 pp.69-76